

広島経済大学研究論集
第30巻第1・2号 2007年10月

半世紀間における日系アメリカ人社会の変容 —— 阿川弘之著『カリフォルニア』に見る日系アメリカ人像との比較 ——

田 中 泉*

1. はじめに

今回利用した阿川弘之著『カリフォルニア』（新潮社、昭和34年11月初版発行）は、2006年度に留学していたカリフォルニア大学バークレー校の東アジア図書館から借り出したものである。この本を、図書館3階の近代日本文学の棚で偶然見つけたときは嬉しかった。現在、この単行本『カリフォルニア』は、絶版となっているからである。日系アメリカ人史の資料を探すために遥々やって来たバークレーでこの単行本を読むことが出来たのは、幸運であった。

『カリフォルニア』には、1950年代半ばに日本からやってきた人々が出会ったカリフォルニアの日系人社会が描かれている。阿川が自身の随筆で述べているように、昭和30年11月から翌年12月までロックフェラー財団人文科学部門の給費留学生として、シアトルを「研究拠点」としてアメリカに滞在している。その研究テーマは「日系アメリカ人の社会と生活」で、当然、ロサンゼルスやサンフランシスコにも調査に出かけ、その時の体験をもとにこの小説を書いたと思われる⁽¹⁾。

半世紀前の文学作品に描かれた日系アメリカ人像を、半世紀後の現在に私が出会った日系アメリカ人と比較して、その変貌ぶりを明らかにするとともに、移民社会アメリカの様相について考察するのが、この論考の目的である。

阿川が著したものでは、『雲の墓標』や『米内光政』・『井上成美』・『山本五十六』のいわゆる海軍三部作に代表される戦記小説、また、『南蛮阿房列車』に代表される鉄道旅行随筆が有名であるが、忘れてはならないものに『魔の遺産』と『春の城』がある。いずれも、広島への原爆投下をテーマとしたものだ。阿川自身、広島市の出身である。

* 広島経済大学経済学部教授

広島は、第二次世界大戦前において、最も多くの海外移民を出した地域のひとつで、とりわけ、ハワイやカリフォルニアに移住した人は多い。戦前の広島で、近所に移民を出した家があるというのは、珍しいことではなかった。『カリフォルニア』にも広島にルーツを持つ日系アメリカ人がたくさん登場する。阿川は、アメリカを訪れる以前から、移民についての認識があり、関心を持っていたと思われる。

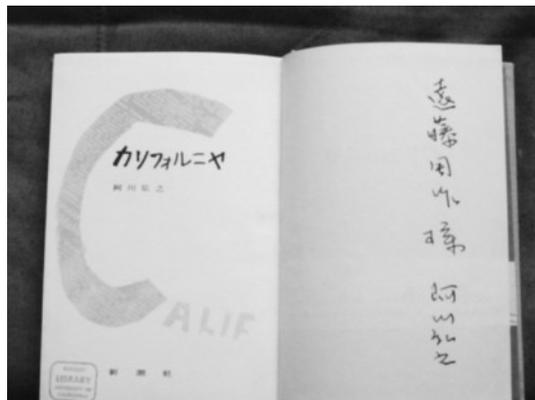
阿川の著作では、上述の戦記小説や随筆をよく読んでいたが、この『カリフォルニア』はまだ読んでいなかった。それで棚から手にとって見たわけだが、表紙をめくって驚いた。そこには、著者本人が遠藤周作に贈呈したことを示す署名があったからである。⁽²⁾

なぜ遠藤周作宛の署名本がそこにあるのだろうかと調べていると、本の表紙裏には、Gift of Shusaku Endo という付箋が張ってあった。つまり、遠藤自身が、他の作家から寄贈された本をこの図書館に寄付したことを意味する。後日、同図書館の日本語書籍収集担当主任の石松久幸氏を訪ね、詳細を伺った。それによれば、この本が寄贈されたのは、1986年7月で、その数、3779冊。郊外から都心に引っ越し手狭になった遠藤氏が、その作品を英訳したヴァン・C・ゲッセル (Van C. Gessel) 教授との機縁で、同図書館に寄贈したとのことであつた。⁽³⁾

この本と出会わなければ、半世紀前のカリフォルニアの姿を知り、現代と比較することは難しかったであろう。もちろん日系人の方たちから話は聞けるが、人間の記憶は曖昧で変化するものである。また、同様に日本からやってきた者の視点で比較できたのも幸いだった。阿川氏と遠藤氏に感謝したい気持ちである。



(写真1) 表紙



(写真2) 署名が入った表見返し

物語は、3人の日本人と1人の日系アメリカ人二世が乗り合わせた太平洋航路の貨客船がサンフランシスコに近づくところから始まる。今なら飛行機でひとつ飛びのところを、彼らが乗った船は11日間かけて太平洋を横断する。

3人は、それぞれ、当時の日本からアメリカに渡る人びとのモデルであろう。

この小説の主人公である田澤健は28歳、ロサンゼルス日本語学校の講師になるために渡米する。阿川は主人公に女性に対して不器用な青年像を求めている。同船した留学生小川京子に惚れ込み、ロサンゼルスへ向かう列車の中で強引に迫って撥ねつけられてしまう。それでもあきらめずに彼女を求めるが、後半では、日本語学校の白人の女生徒と本格的な恋愛する。つまり、この作品は、表向きは、恋愛小説なのである。

ロサンゼルス音楽大学に留学する小川京子(23歳)は、いわゆるお嬢様で、英語もある程度話せて、恵まれた留學生活をおくる。主人公田澤健の求愛を受け入れるような振りをしてかわしながら、アメリカ人の楽団員と恋愛する。

野島光枝(21歳)は「戦争花嫁」。日本に駐留していたアメリカ兵と結婚し、先に帰国した夫の待つカリフォルニアへやってくる。特にアメリカに期待を抱いている訳でもなく、ただ夫と暮らすための渡米である。しかし、渡米後は夫以外に知り合いのいない異郷で、故郷を懐かしむように、日本人男性である主人公に想いを寄せる。

日系アメリカ人二世のフランク・良太郎・マチダ(40歳)は、日本へは生まれて初めての旅で、両親の故郷和歌山を訪ねた帰りである。中部カリフォルニアの「百姓」で、「五尺八寸、二十貫は優に越えてるだらうと思はれる堂々たる體軀の持主で」「こんなに栄養が足りてゐるという見本のやうな男である。」田澤は、はじめ、マチダのことを、「よほどの僻村」から来た男として軽く見ている⁽⁴⁾。

2. 古き美しき日本の幻想

「私の心にあつた日本は、父や母の物語に聞かされてゐた、古い美しい日本だ。清らかな自然と、禮儀正しい人々にあふれた、それは、古い氷漬けの日本だつた」⁽⁵⁾

阿川は、フランク・マチダに、戦後の日本を訪れた日系二世の複雑な日本観を、主人公田澤健との会話の中で語らせている。田澤は、「それで、日本は如何でした？」ときわめて月並みな質問をしている。

マチダは、「櫻が咲いてゐた。綺麗だつた。」「村の人たちは、大體において私に親切であつた」と答えている。しかし、清らかな自然があり礼儀正しい人々の住む「古

き美しい日本」が幻想に過ぎなかったと失望している。2人の紳士が列車内で席を譲り合っている際に老婆に席を取られて腹を立てる姿や、ドルが入った財布を持つアメリカ人の前では卑屈な態度をとる日本人が、相手にわからないだろうと日本語で悪口を言うのを聞いて、その狡猾さと嫉みの心を感じとったのである。

一方で、アメリカと近代的な戦争をやった国が、「紙と木と花のお伽話」のままではあるはずがないと、納得もしている。ただ、東京のバスガイドが建設中の東京タワーを「日本のエッフェル塔」、華厳の滝を「日本のナイアガラ」、江ノ島を「東洋のマイアミ」と表することに恥ずかしさを覚えている。アメリカを祖国と信じるマチダも、心のどこかで父母の故郷を誇りたい気持ちを抑えきれないのである。

これらの内容は、阿川が、滞米中にどこかで日系二世から聞き及んだのかもしれない。しかし、実は、阿川自身が当時、日本社会や文化の変容について不満を感じ、マチダの口を借りて批判したのではないだろうか。

半世紀後のカリフォルニアでは、新聞や雑誌に「ふるさと日本観光ツアー」の広告をたくさん見つけることができる。ツアーの日程表には、皇居、浅草、鎌倉、箱根、富士、日光、京都、広島、宮島と「古き美しき日本」を象徴するような、おなじみの観光地が並んでいる。このツアーに参加するのはどんな思いで日本の街や人を見るのだろうか。

一方、日本を訪れる日系アメリカ人の若者の中には、映画で見た日本武道を学び、漫画を読むために日本語を勉強する人も多い。ルーツとしての文化というよりも、「異文化」として魅力ある日本に興味を持っている。日本への留学経験のある日系四世の女性は、「初めて日本に行った時、人々や、公共交通、住宅設備が効率よく働くことに感心した」と語っていた。もはや、彼らは、マチダのように、父祖の語る「古き美しい日本」を求めてはいない。むしろ、阿川が見聞した半世紀前の日系人とは異なり、自分の視線で日本社会を冷静に評価している。

3. アメリカ人の日本人観

「私は、日本人だと云つて、差別するやうな事はしない。」「ただ、・・・日本人は、住まひをきたなくする癖があるから其の点も充分注意してほしい。⁽⁶⁾」

田澤健は、ロサンゼルス滞在のためのアパート探しの際に、家主の白人の老女からこう言われる。それは、新聞の広告を頼りに何軒か尋ねて回り、その度に断られた末に、電話で「日本人だけど部屋を貸すつもりがあるか」とあらかじめ前置きした上で返ってきた言葉だった。

人種分離を禁じる公民権法が制定される前の1950年代。南部を中心に、列車やバスの座席、ホテルやアパートなどの公共施設が白人用と有色人種用に区別されていた時代である。加えて、対日戦争が終わって、10年前後しか経っていない時期のことである。日本人には部屋を貸したがない家主がいるのも当然である。

現在はどうだろうか。今回、私は、渡米してからごく短期間でアパートに入居できた。家主は、中東系の人である。この家主に会えたのは、日本人向けの民宿を経営する日本人Sさんのお陰である。私のようなわずか1年の滞在予定者にとって、1年限りの契約でアパートを借りるのは難しい。あわせて銀行口座の開設や自動車保険代理店との契約まで助けてくれた彼女の存在は非常に有難かった。

カリフォルニアには、現在、このように個人的に家主との仲介をしてくれる日本人が幾人かいる。もう一人の女性は、「日本人は部屋をきれいに使うので歓迎する家主が多い」と言う。また、「日本人が歓迎されるのは、支払い能力があるというイメージも定着しているから」とも言う。それは、個人の能力ではなく、その民族集団のイメージである。当然、日本人の中には、部屋を汚く使う人や、家賃を滞納する人もいるはずだ。

多民族社会カリフォルニアでは、一般に、人種・民族についての偏見や差別が少ないといわれる。しかし、人の流入が多いサンフランシスコ湾岸地域でのアパート探しは簡単ではない。とりわけ、アジアや中南米から来た人が、経済的能力や信頼性による民族集団のイメージによって排除されることは十分あり得る。日本人が歓迎されるということは、歓迎されない人々もいるはずである。とすれば、半世紀前と状況は変わっていないことになる。

4. 一世

「当時の金で二萬圓溜めると、土産の荷の一つも拵えて國に錦を飾つて、あとは利息で食へるといふので、みんながそれを目標にして進みました。必然的に腰掛主義⁽⁷⁾になつたわけだ。」

田澤健は、身元引受人となった仁保菊蔵から戦前の一世の話を聞かされる。仁保菊蔵は、広島生まれの一世。ロサンゼルス⁽⁸⁾の日本町リトル・トーキョーで、備後屋という輸入雑貨兼食料品店を経営している。故郷に錦を飾らずアメリカに残り、戦時の収容所生活を乗り越え、成功した人だから腰掛主義を批判するのである。

単身アメリカに来て、日曜も祭日もなく、わき目も振らず働いて、稼ぐだけ稼ぐと家族の待つ日本に帰ってしまう。アメリカ人と交流せず、恥も外聞もなく暮らす。

そんな人たちが、アメリカ社会で歓迎されるはずがないということを、仁保菊蔵は言いたいのだろう。

20世紀当初、安孫子久太郎や鷺津尺麿ら一世たちのリーダーは、日系新聞『日米』を発行して、「土地を買って定着しよう」、「アメリカのルール、習慣に従おう」と呼びかけた。出稼ぎではない移民となり、アメリカ国家と社会の発展に寄与することが、差別を受けない一番の方法と考えたからだ。⁽⁸⁾

この考えに従って日本に帰らなかった一世たちが播いた種が実を結んでいるのを、今のカリフォルニアで見ることができる。

2006年10月15日、北カリフォルニア各地で花農園を経営するシバタ家が所有するMt. Eden Nursery Tea Gardenの百年記念祭があった。そこは一世のゼンジロウが最初に購入して以来、現在までの成功譚の起点になった所である。その二世のヨシミは、著書 Across Two Worlds の中で「父は、日本人ではなく、白人に向けた花を育てて売った。例えば、クリスマス用、母の日用の花を」と、父親がアメリカ社会への適応に努めたことを記している。⁽⁹⁾

シバタ家のような成功例は、他にも多くあるだろう。しかし、もちろん、故郷に錦を飾ることもなくアメリカ社会に居続けた一世のすべてが成功した訳ではない。いわゆる「ブランケ担ぎ」といって、仕事を求めて農園や工事現場を移動し続けた労働者で、放浪の末に、人知れず骨を埋めた人もいただろう。しかし、現在、カリフォルニア州で約40万人いるといわれる日系人の大部分は、アメリカ社会にうまく適応して踏みとどまった一世たちの子孫であることは確かだ。

5. 広島弁・広島県人

「牛にマッサージをして、どうなろうかい。牛肉は、アメリカが本場ですよ。」⁽¹⁰⁾

これは、田澤健が日本では牛にビールを飲ませたりマッサージをしたりして、最近美味しい牛肉もあるという話をしたのに対して、「そうかな?」と疑問を呈した仁保菊蔵の言葉である。

「どうなろうかい」を現代風にいえば「どうなるか」、つまり「どうもなりはしない」。「無益なこと」を意味する広島弁である。カリフォルニアやハワイで話される日系人の日本語は、広島弁が混ざるとよく言われる。これは、広島県出身者の多さを物語っている。また、「仁保」という名前は、広島市南部の海岸地域の地名である。移民が多く出たところで広島出身の阿川はこれを意図的に使ったのであろう。たとえば、1885～94年に官約移民としてハワイに入った移民約3万人のうち、広島

県出身者は約1万1千人が該当する。また、1899～1932年に海外に移民した広島県人は約9万2千人で、全国の府県の中で群を抜いている⁽¹¹⁾。

では、なぜ広島県から移民が多く出たのかという疑問が生じる。同じく移民の多い山口や和歌山、福岡、熊本沖縄など各県と共通するのは、山がちで平野が少なく、米作りに適さない土壌が多いことがあげられる。なかでも、広島の西半分、旧国名でいう「安芸」は、明治初期、農民1人あたりの耕地面積が全国73国中、72番目であった⁽¹²⁾。

安芸地方では、現在は、沖合への埋め立てが進んでいるが、1960年代までは山が海岸まで迫っていて平野が極端に少なかった。また、広島平野を貫流する太田川の下流域は、三角州特有の砂地で、現在でもネギや青菜などの畑作が中心である。水田に適した土地はわずかだったのである。

耕地の少なさに対して、広島県は人口増加率が大きかったのが特徴である。1721年を100とした比率で1872年には185に伸びている（全国平均は127）。浄土真宗を熱心に信仰する「安芸門徒」と呼ばれる人たちが、教えである殺生の禁忌を守り、嬰児を殺す間引きをしなかったからだといわれる⁽¹³⁾。

米作用地の少なさと人口の増加という矛盾に加え、増えすぎた人口を吸収する産業も古い城下町の広島にはなかった。家を継ぐ長男は別として、働き場のない農家の男は、出稼ぎに行かざるを得なかったのだ。江戸時代には、京阪神地方に大工や左官として出稼ぎに行っていたという。したがって、広島には出稼ぎの習慣がもともあり、海外への出稼ぎもその延長として考えられよう。

広島県人の気質も移民に向いていたといわれる。海岸地域では、漁業も盛んで、海運業もあり、外に出ることを厭わなかった。また、浄土真宗の他力本願は、仏に頼り、自然に身を任せ、人を信じることに通じる。これに、瀬戸内特有の明るさが加わり、苦労や悲しみを乗り越え、未来を信じる積極性が移民として求められる資質であった。このことが、最初に移民したハワイの農園主や政府に高く評価され、積極的な募集につながったとも言われる。

そんな広島からの移民も、1894年に始まった日清戦争によって、減少する。1894年当時、東京から西への鉄道は、広島までしか建設されていなかった。そこで、宇品港（現、広島港）が大陸出兵の起点となり、広島城内に作戦を指導する大本営が置かれた。明治天皇をはじめ、官僚や軍の上層部、さらには、帝国議会まで広島に移り、臨時首都の様相を呈した。また、出兵する兵士に供給する糧食と軍服などの装備を製造する工場も作られた。このため、仕事が増え、周辺から人が集まり、広島は賑やかな町となったのである。

しかし、その繁栄も日露戦争までで、軍需工業が不況となり、広島に集まった人々は再び外に出て行かざるを得なくなった。このため1900年代後半から1910年代にかけて、再び移民は増加する。1908年に日米間に紳士協定が結ばれて、呼び寄せ以外の新移民のアメリカ渡航が自粛されると、移民先はブラジルへと変わった。

「移民は移民を呼ぶ」という言葉がある。3年の出稼ぎで十分な金を蓄えたものは、周囲への土産を携えて帰り、大きな家を建てた人々を驚かせたという。それを見た若者が我もと続いたのである。また、ハワイやカリフォルニアに定着しつつあった人たちは、家族や縁戚者を呼び寄せたのである。特定の地域から移民が増えたのはそれが理由である。

現在も、カリフォルニア各地に広島県人会がある。活動の頻度や内容には、県人会によって差があるが、概して、その目的がかつての情報交換や相互扶助から、単なる娯楽や懇親に変わってきているようだ。新年会やクリスマス会などで年に何度か集まったり、小旅行を行っている。参加者の多くは、高齢の二世や三世で、「若いメンバーが集まらないのが悩みの種」と言う声を聞いた。

6. 日系アメリカ人二世

「日系人と云つても、僕は別に広島縣人ではないよ。広島縣と云うても何処にあるかよう知らんし、行つた事ありません。・・・僕はアメリカ人よ。」「広島縣だ和歌山縣だと云つて近寄つて来るが、僕らには、もう縁のない事だね。」⁽¹⁴⁾

田澤健をアメリカへ呼び寄せた仁保菊蔵の息子フーバーが、田澤に語った言葉である。フーバーの仕事がガーデナーと聞いて、田澤が「あなたも元々広島縣人で、私の祖父と親父が広島縣でしたが、二人とも花作りが好きで、得意でしたよ」と、お愛想を言ったのに強く反発し、父親ら一世を批判したのである。

人間の精神構造として、故郷を離れて暮らす人々が母国や同郷人とのつながりを求めるのは自然ではないだろうか。多くの一世たちがやって来た1900～20年代、白人の仕事奪う有色人種へ風当たりは強まった。黄禍論である。そんな中でも、故郷に錦を飾ることをはじめの目的としていた一世は、心の中から日本を捨て去ることはなかったのだろう。

一方、二世たちの多くはアメリカ生まれで、アメリカの学校に通い、アメリカ市民としての教育をうけた。家では日本語も話すが、学校や外では英語を話す。しかし、アメリカ市民である彼らは、日米開戦後はキャンプに強制収容され、日系人であることを思い知らされる。だからこそ、彼らは、その理不尽さを感じながらも、

アメリカ人として認められようとしたのではないか。合衆国に忠誠を誓い、日系人部隊への志願した若者が出たのはその表れだろう。⁽¹⁵⁾

わざわざアメリカ人であることを主張するフーバーの心根は、英語もうまく話せずアメリカ人になりきろうとしない一世への不満だけでなく、社会の中でアメリカ人としてなかなか認められなかったディレンマが潜んでいるように感じる。

現在、アダルトスクールのESLクラスで英語を教えている三世のアン・タケフジはキャンプで生まれた。日本語はほとんど話せない。「二世である両親は私に日本語を教えませんでした。アメリカ社会で生きるためには、要らないと思ったのでしょう」と話す。⁽¹⁶⁾彼女の家庭では、すべて英語で会話しているようだ。

7. 日本語学校

「あまり気にしないほうがいい。あの子たちは、必要以上にアメリカ人なのだよ。」
「二世三世の生徒は、親の希望でいやいや来ているのが多い。パブリック・スクールを済ませてから、遊びたい時間を、もう一度勉強をしに来るのだから。」⁽¹⁷⁾

「南加日本語学院」の教師となった田澤健が、日系の生徒たちとの関係がうまくいかないと愚痴をこぼしたのに対し、院長の佐々木孝造はそう言って励ましたのである。

50年前のカリフォルニアには、仏教会や日系のキリスト教会が運営する日本語学校が各地にあった。平日の午後や土曜日に授業があったが、生徒たちが渋々やって来る状況はどこも似ていたようだ。今もサンフランシスコの日本町に住む三世のダイアン・マツダは、「近くの日本語学校には行ったけど、いつも遊んでいた」と話す。また、カリフォルニア大学バークレー校で講師として日系アメリカ人史を教えている三世のジェリー・タカハシも、「親に言われて1年間だけ通ったけど、つまらなくて止めてしまった」と言う。前述のアン・タケフジと同様、彼もキャンプ生まれで、日本語をほとんど話せない。⁽¹⁸⁾

現在の日本語学校は、どんな状況だろうか。日本の文部科学省は、世界各国で、日本の学習指導要領に沿って週5日・全日制の授業をする日本人学校のほか、土曜日だけ授業する日本語補習校を運営している。アメリカでは、後者が圧倒的に多い。⁽¹⁹⁾また、カリフォルニアには、このほかに、私立の日本語補習校が多い。

州立サンフランシスコ大学で学んでいる二世のアヤ・ナカノは、生まれ育ったロサンゼルスにある私立の日本語補習校に小学1年生から高校2年まで通った経験を持つ。「授業は土曜日の朝から夕方まで、国語と数学が2時間ずつ、理科と社会科

が1時間ずつできつかった。それと、毎週漢字テストがあって、そのために30～50個は覚えなさいといけなさいのは特に大変だった」と言う。それは、日本の学校での1週間分の内容を土曜日だけで教えているような感じだ。⁽²⁰⁾

それは、生徒の多くが駐在員の日本人の子どもで、2、3年も経つと日本へ帰ることを予定しているからだろう。そのために、日本語補習校は、日本の学校の授業に遅れることなく、日本の中学や高校を受験するために必要な知識を日本語で教え込むのであり、日本における学習塾と同じようなもので、かつての日本語学校とは性格が異なる。

アヤ・ナカノは「自分は日本に帰る予定はないけれど、英語が苦手なお母さんとは日本語で話すので、頑張っつてついでつ行った。それと、自分と同じ境遇の子が5、6人いて、その子たちと一緒にいたかったので、やめたくなかつた。彼らが今でも一番分かつり合える友達だ」と言う。

彼女は、羨ましいくらいのパイリンガルになっている。しかし、彼女の子どもの世代は、やっぱり日本語は話せなくなるだろう。親が英語を話せれば、日本語の必要性がなくなるからだ。

8. ピクニック

「日は高かつた。カリフォルニアの静かな森の中へ、軍艦マーチやカンカン娘の旋律が吸ひこまれて行くのは、何だか白晝夢のような状景であつた」⁽²¹⁾

田澤健は、仁保菊蔵の通う教会のピクニックに招待される。食べ物をつくさん積んだ車に分乗して、郊外の森へ出かけて行き、バーベキューの炉を中心に皆で車座になり、食事をするのである。一段落すると、余興で歌や詩吟を披露しあうのだが、それは、日本一色の趣なのである。

2006年9月30日、サンフランシスコ日本町の百周年を祝う行事のひとつとして、ゴールデンゲートパークでピクニックが行われた。⁽²²⁾

私も、前述のダイアン・マツダ一家に誘われて参加した。人々は、家族ごとに陣取つて敷物をひき、バーベキューをしたり、持ち寄つた料理を食べながら、思い出話に花を咲かせていた。焼き魚やフライドチキンにサンドイッチや握り飯など、和洋混じつたご馳走を頂きながら、二世たちの話を聞いた。「昔は、県人会や教会ごとにピクニックがつくさんあつて楽しかつたなあ。」「料理をほかの家族と交換したりして仲良くなつたものよ。」「子どもたちのゲームがあつたりして賑やかだつたね。」と懐かしむように話された。

会場の正面では、やはり、50年前と同じように、バンドの伴奏で歌が披露されていたが、「北酒場」や「川の流れるように」などの日本の演歌であった。聞かせる声だが、日系三世らしき歌手の歌詞の発音や小節の回し方が微妙に違うのである。和魂洋才ならぬ、和才洋魂だろう。

このようなピクニックは、近年は行われていなかったらしい。今回は、記念行事として昔のそれを再現しようとしたものなのだ。「これをきっかけに、日系人のピクニックがまた復活すると楽しいですね」とダイアン・マツダに言うと、「それは難しいですね。三世や四世は、日系人としての意識が薄れているし、コミュニティ活動をしようという人も減っていますから」と寂しそうに答えてくれた。

それは、百周年という区切りの年に、ホテルやモールなどの中心的な施設が売却されて、大きく変わろうとしている日本町の姿と重なる⁽²³⁾。

9. 強制収容の歴史

「クリスチャンも佛教徒もあるものかね。西岸には、一時、日本人は一人もをらなくなつた。孤兒院に入れられていた孤兒まで引き立ててキャンプに入れたのだから。一番問題は、アメリカ市民である二世、三世を、敵性人種といふ名で抑留した⁽²⁴⁾ことですよ。」

田澤健が「日本人は皆抑留されたわけですか？」と尋ねたのに、一世の仁保菊蔵が答えた言葉である。

第二次世界大戦中の1942年2月19日、フランクリン＝ローズヴェルト大統領により、西海岸三州の海岸地域から日系人を強制的に排除し、内陸の抑留施設に収容する行政命令第9066号が出された。この命令では、16分の1以上日本人の血が入っている者（つまり五世まで）が対象とされ、約12万人の日系人が自由を奪われることになった。

これは、黒人奴隷制度や先住アメリカ人の強制移住と並んで、アメリカ史上最大の汚点とされる。合衆国憲法で保障されている基本的人権を踏みにじったからである。1960年代後半に起こった様々なマイノリティ運動の中で、日系人の中でもこの誤りを正そうとする運動が盛り上がった。その結果、1988年になって、ようやく、レーガン大統領が公式に謝罪し、補償金を払う法案に署名し、かつての命令が誤りであったことを認めたのである。

現在、カリフォルニア州の教育スタンダードは、4年生の社会科授業の中で、日系人の強制収容の歴史を教えることを要請している。アルバニー市立マリーン小学

校では、1年間に15時間使って教えている。担当教諭クリスティン・ガフは、30代の白人女性である。「政府が市民の権利を侵害することもある。子どもたちには、大事なものは、市民がそれに立ち向かうべきであることを教えたいから」と言う。また、この授業には、近くに住む日系三世ゴードン・ナガイが証言者として協力している。⁽²⁵⁾

しかし、「そのような取り組みは、とても素晴らしいけど、とても珍しいです」と、1970年代から日系アメリカ人史を教えるためのカリキュラム作りをしてきたフローレンス・ホンゴウは言う。⁽²⁶⁾確かに、日本と違って、アメリカではスタンダードに則って教科書に記述があっても、教員の裁量権が大きく、人によって教える内容や時間は異なる。教員に関心がなければ、一言で済ます場合もあるようだ。

歴史には光と陰がある。陰の時代を教えたくない教員もいるだろう。日本でも、過去の植民地支配政策には、触れたがらない風潮がある。しかし、陰の時代を繰り返さないためには、むしろ、将来を担う子どもたちに正しく教える必要があろう。その意味で、日系アメリカ人の強制収容の歴史を教えられているのは価値がある。

10. 異人種間結婚

「マーガレットが私に一と言も断らずに夏の旅に出てしまった?」「しかし見當もつかないと云へば嘘にならう。私は、大體のことをすぐ推察した」⁽²⁷⁾

田澤健は、日本語学校の生徒でビバリーヒルズに住む富豪の娘、白人のマーガレットとの恋愛に落ち、何度もデートを重ねる。しかし、田澤が彼女との結婚を意識するようになった頃、その交際が周囲にも知られ、夏休みには、彼女は父親の差し金によって遠く東海岸の避暑地へ連れて去られてしまう。田澤も佐々木孝造や仁保菊蔵から注意を受けることになる。

阿川が滞在していた50年前、異人種間結婚を禁止するカリフォルニア州法はすでに廃止されていたとはいえ、第二次世界大戦終了からまだ10年しか経っていないころのことであり反日感情もある。普段は差別をしない人でも、身内の結婚となれば明らかに差別するのは、日本でも同じで、親が子供の結婚相手の家庭を調べることは、少し前までよく聞いたものだ。

前述のゴードン・ナガイは1961年、カリフォルニア大学バークレー校の大学院生のときに、白人の女性と恋愛して結婚した。「彼女の父親はヨーロッパで戦死していたのですが、母親がすごく反対しました。日系人はだめだと。長男が生まれてからやっと許してくれました」と、当時を振り返る。⁽²⁸⁾

彼のように、異人種間結婚をしている日系人男性の数は、日系人女性に比べて少

ない。これは人種差別のほかに、日本的な家父長制度が理由として考えられる。彼は自分の母親からも「アメリカ人より日本人のお嫁さんの方が優しくていいよ」と反対されたようだ。

小説では、仁保菊蔵が「日本人には、何と云うても、米の飯と日本人の嫁さんとは、やつぱり無くてはかなはぬものですよ。早い話が、白人の嫁さんが来たとしてみなさい。うちのミセスでも私でも、言葉が気持ちのすみまでは、とても通じない」と反対している⁽²⁹⁾。

仁保菊蔵の言葉の背景には「妻が夫の家庭に入る」という日本社会特有の考え方がみられる。日系アメリカ人の家庭には、男性中心の家族制度がより強く残っていたようだ。家を継ぐのは男子であり、受け入れる家族としては嫁が日本人か日系人でないと困る。これに対して、嫁いで家を出て行く女子は誰と結婚しても構わない。異人種・民族と結婚する日系人女性が、男性よりも多い一因だろう。

2007年の正月、日系アメリカ人家族が集まる新年パーティに招かれた。そのパーティには、4人の二世の兄弟姉妹とその子から曾孫まで、つまり、五世までの4世代、60人が参加していた。日系人に混じって3人の白人男性がいたのに対して、白人女性は皆無であった。もちろん、それらの白人男性はみな日系人女性の夫である。

しかしこうした傾向も、ごく近年は変わりつつあるようだ。異人種・民族と結婚する日系人男性も増えてきている。日系アメリカ人社会において続いてきた家父長制的な考え方が揺らいでいることは、日系人としてのアイデンティティも薄らいでいることの証拠でもある。

11. おわりに

50年前に日系アメリカ人社会の中心世代であった二世に代わって、現在は、三世ないしは四世が中心世代になっている。その中では、企業・農場経営者に加え、弁護士、医師、エンジニア、大学教授など専門職を多く輩出し、社会的に上昇した日系アメリカ人は、「モデル・マイノリティ」と呼ばれる。それに伴って、日本町や県人会、仏教会などのコミュニティにおける助け合いがあまり必要なくなっていることも、日系人としてのアイデンティティを薄れさせている要因であろう。

しかし、四世や五世の若い日系アメリカ人の中で、祖先の故郷である日本の文化や言葉に興味を持ち、日本語を習ったり、コミュニティの活動に参加している人がいるのも確かである。また、日系アメリカ人の歴史を未来に伝えていこうと活動している人たちもいる⁽³⁰⁾。

一方、現在、仕事や観光、留学などの理由で、カリフォルニアを訪れる日本人は

多いが、日系アメリカ人の歴史や文化に興味を持ったり、日系アメリカ人と交流をしようという人は少ない。それは、従来の日本の学校教育において、日本からの出移民の歴史を学ぶことがあまりなかったからである。⁽³¹⁾

また、かつては、移民を送出した地域の人々とアメリカにいる親戚との間で交流があったと思われるが、世代を重ねるとともに互いに疎遠になっていることも事実である。同じ祖先を持つ日系アメリカ人と日本人が、少しでも、接触・交流を持つ機会を増やすことで、互いの歴史を知ることは意義のあることだと思う。

注

- (1) 最近では、『文藝春秋』第85巻第4号(2007年3月号)の巻頭随筆「葎の髓から(百十九)一日系老教授の死を悼む」の中で、明らかにされている。
- (2) 遠藤周作宛の著者署名本はこれだけではなかった。北杜夫の大ベストセラー『どくとるマンボウ航海記』や山口瞳の代表作『血族』などもあった。
- (3) Gessel教授は、現在、ユタ州のブリガム・ヤング大学に所属している。詳細は <http://maxwellinstitute.byu.edu/viewauthor.php?authorID=546>
- (4) この『カリフォルニヤ』には、「国風米」という銘柄の米が登場する。物語を読み進めるうちに、さらに意外なことが分かる。この「国風米」を作っているのは、マチダの農場なのである。物語の中で、田澤は、この農場を車で訪ねているが、当初、風采の上がないマチダを、「片田舎の百姓」と思い込んでいる。だから、道順を尋ねた白人から「ライスキングのマチダの旦那か?」と訊き返されたとき、「えっ?」と驚くことになる。そして5千エーカーの畑に、飛行機でモミを撒くところを見せられ、感動せざるを得なくなるのだ。現在、カリフォルニアに住む日本人にとってなじみ深い米といえば、「国宝ローズ」だろう。テレビの日本語チャンネルでも、「お米の国のお米だもの」と宣伝している。私がパークレーの日系スーパーで買ったのもこの銘柄だ。ミディウム・グレインで、日本の米より若干細いが、安いし十分満足できる味だった。国風と国宝。発音すると似ている。これを著者がただ真似をしただけかも知れないと、最初は思った。現実には、ライスキングといえば、国宝ローズをつくっている国府田農場である。そこは、フレズノの北西ドス・パロスにある。物語のマチダ農場は、ロサンゼルスから99号線を3時間北上し、西に入った所と設定されているが、それはまさにその位置である。阿川が国府田農場を訪れたかどうか定かでないが、「ライスキング」がそれを推測させる。「ライスキング」と呼ばれた国府田敬三郎とその農場については、田中静香氏のホームページに詳しい解説がある。<http://likeachild94568.hp.infoseek.co.jp/gunzok.html>。国府田農場のホームページは、<http://www.kodafarms.com/index.html>
- (5) 阿川弘之『カリフォルニヤ』新潮社、昭和34年、14ページ。なお、原文は、すべて旧仮名遣いである。
- (6) 同書、53ページ。
- (7) 同書、71ページ。
- (8) 鷺津尺魔の人物と思想については、佐渡拓平『カリフォルニア移民物語』亜紀書房、

1998年刊を参照。

- (9) Yoshimi Shibata “Across Two World” 2006, pp.5-6.
- (10) 阿川, 前掲書, 68ページ。
- (11) 広島県からの移民数については, 広島県編『広島県移住史』第一法規出版, 8ページ。
- (12) 同書, 28-29ページ。
- (13) 同書, 35-42ページ。
- (14) 阿川, 前掲書, 66ページ。
- (15) 日系人部隊についての著作は多いが, 矢野徹『442』柏艸舎, 2005年刊, 宍戸清孝『Japと呼ばれて』論創社, 2005年刊, 渡辺正清『ゴー・フォー・ブローク』光人社, 2003年を参照。
- (16) アン・タケフジへのインタビューは, 2006年10月6日に行った。
- (17) 阿川, 前掲書, 59-60ページ。
- (18) ジェリー・タカハシ先生には, 講義に出席させてもらったりしただけでなく, 研究調査上の貴重なアドバイスをいただいた。その著書としては, Jere Takahashi, “Nisei / Sansei” 1997 がある。
- (19) 文部科学省の運営する「サンフランシスコ日本語補習校」のホームページは, <http://www.sjlc.com/>
- (20) アヤ・ナカノへのインタビューは, 2006年12月14日に行った。なお, 新二世とは, 戦後移民した新一世の子どもの世代のことである。彼女が通っていたのは, ロサンゼルス近郊のサンタモニカにある「あさひ学園」で, 幼稚部から小中学部, 高等部までである。カリキュラムなどの詳細は, 同学園のホームページを参照。<http://www.asahigakuen.com/>
- (21) 阿川, 前掲書, 90ページ。
- (22) サンフランシスコの日本人町の100周年記念行事の詳細については, 同実行委員会のホームページを参照。<http://sfjapantown100.org/>
- (23) サンフランシスコの日本人町の100周年記念行事と中心施設の売却についての分析は, 拙稿「北カリフォルニア日系アメリカ人コミュニティの最近の動向 - サンフランシスコ日本町100周年とジャパンセンター売却問題-」『広島経済大学四十周年記念論文集』2007年刊, 983-1006ページを参照。
- (24) 阿川, 前掲書, 90ページ。
- (25) クリスティン・ガフ教諭へのインタビューは, 2007年1月11日に行った。
- (26) フローレンス・ホンゴウへのインタビューは, 2007年3月2日に行った。
- (27) 阿川, 前掲書, 219ページ。
- (28) ゴードン・ナガイへのインタビューは, 2007年1月25日に行った。
- (29) 阿川, 前掲書, 238ページ。
- (30) 組織だった取り組みとしては, 日系アメリカ人市民協会 (Japanese American Citizen League) や全米日系アメリカ人歴史協会 (National Japanese American Historical Society) の日系アメリカ人史学習カリキュラムや, スタンフォード大学フリーマン・スポグリー国際教育研究所 (Stanford Freeman Spogli Institute for International Studies) のスタンフォード国際・異文化理解教育プログラム (Program on International and Cross-Cultural Education) がある。
- (31) 漸く, ここ数年, 日本でも日系アメリカ人史学習の教材開発が行われるようになって

た。例えば、森茂岳雄(2002)「グローバル教育と多文化教育のインターフェイスー移民史学習の可能性ー」中央大学教育学研究会『教育学論集』第44集、中山京子(2006)「多文化教育の知の導入による小学校社会科学習内容の再構築ー単元『海を渡る日系移民』の開発を事例としてー」全国社会科教育学会『社会科研究』第65号。また、森茂岳雄を代表者とする多文化社会米国理解教育研究会が取り組んだ実践研究がある。その成果については、同研究会著『移民を授業するー日系アメリカ人学習活動の手引き』(2007)を参照。

[付記]

この論考は、サンフランシスコで発行されている『北米毎日新聞』で、2006年10月5日から2007年3月27日まで12回にわたって連載したコラム「カリフォルニア・カリフォルニア」を加筆・修正したものである。